

# そさい栽培管理用語の解説(2)

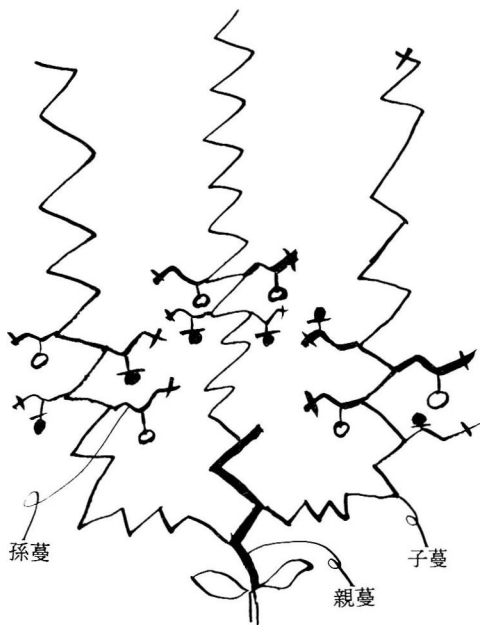
札幌研究農場 中原 忠 夫

## 整 枝 (摘芯)

トマトを植えたまましばらく放任すると、腋芽が伸びてどれが主枝かわからなくなる。株の発育、実の肥大のためには側枝をとった方がよい。またウリ類では種類、品質によって、おおよそ、なり花の着く蔓と位置がきまっており、着果した位置によって質が左右される。早めに着果させ、良質のものをとるためには、むだな枝をとり除かねばならない。これが整枝であってメロンなどではとくにその上手、下手が収量、品質に大きく影響する。

露地、トンネルのメロンの整枝法は、まず株間によって何本子蔓を仕立てるかを定める。株間90~100 cmの場合3本仕立てるので、親蔓を4~5枚で早目に摘芯する。伸びてきた子蔓は適当な間隔を与えて配置して伸長を促す。メロンの雌花は孫蔓(子蔓)の第1節につくが、低い節位の蔓では果が小さく、ネットの出も悪い、また高いと果は大きくなるが甘味がおちるなどの欠点があるため、品種にもよるが8節前後の孫蔓3~4本は2葉を残し摘芯し、他の孫蔓は早めに摘む。子蔓も早目に24節前後で摘芯する。1株当たりの着果数はプリンスなどでは6~9個もならせられるが、ネットメロン(夕張など)では3~6個に制限しないと味がおちる。

メロンの整枝法



## ホルモン処理

トマトなどの実が肥大するのは開花して受精が行なわれ種子ができるためであって、果実内の種子の粒数の少ない場合は果の肥大も悪い。低温、弱光などの不良条件下の促成栽培や、トンネル栽培などで訪花昆虫の少ない場合、受粉が十分行なわれないため着果不良になりやすい。このような場合植物ホルモン剤の処理によって落花を防止し、果の肥大をたすけることができる。反面、トマトなどでは空洞果、奇形果ができやすく、表面は色づいているのに内部が青くて味がまずいなどの欠点も多いので使用には十分注意する必要がある。

ホルモン剤の種類、2, 4-D、NAA(ナフタリン醋酸)CPA(トマトーン)ジベレリンなどがあるが、2, 4-Dは1~2万倍にうすめなければならないなどでトマトーンが最も実用化されている。

トマトに広くつかわれているトマトーンは50~100倍液を花房や花に霧吹で散布する。ただ濃度が高すぎると種子の形成を妨げるため、空洞果、奇形果ができやすいので、気温の高い日中の使用をさけ、夕方か早朝、または曇天に処理する。ふつう20℃以下の場合には50倍液、20℃以上では100倍液を用いるなど温度に注意するとともに、空気、土壤の乾燥程度にも注意して濃度を調節する。若い蔓、生長点にかかると葉害がしやすいから、1花房で3~4花開花した頃をみはからって花房に散布する。

トマトーンはナスでも効果がみとめられている。処理方法としては単花処理と全面散布があり、単花処理では50~60倍液を開花1週間前から開花当日の花に噴霧するか浸漬する。全面散布は4番花以後草勢が強くなった頃100倍液を夕方生長点にかからぬよう全面散布する。またトマトーンはマクワでも着花、肥大促進に効果があるといわれる。